

# 日本ハーディ協会第67回大会

日時 2024年11月2日(土) 11:10~17:40  
場所 西南学院大学  
〒814-0002 福岡県福岡市早良区西新6丁目2-92  
会場教室 中央キャンパス1号館303教室  
電話 092-823-2501(学術研究所事務局) 大学HP: <https://www.seinan-gu.ac.jp/>

開会の辞	(11:10)	総合司会	日本ハーディ協会庶務委員長 東京都立大学教授	亀澤 美由紀
研究発表	(11:15~11:50)	司会	金沢星稷大学教授	辻 建一
			『恋の霊』と幻想の本質—「気質」と「描写」の統合的理解をめざして 東北学院大学大学院博士後期課程	丹野 海晴
昼食休憩	(11:50~13:00)			
総会	(13:00~13:30)	司会	日本ハーディ協会事務局長 近畿大学准教授	高橋 路子
			○役員改選 ○会計報告 ○編集委員会報告(会報・協会ニュース) ○次期大会について ○その他	
シンポジウム	(13:40~15:50)			
	ハーディと食	司会・講師 講師 講師	実践女子大学教授 国士舘大学教授 福岡大学教授	土屋 結城 今村 紅子 福原 俊平
特別講演	(16:00~17:20)	司会	同志社大学教授	金谷 益道
	連形式による語りの可能性の追求: ハーディ詩における連(stanza)	講師	神戸女子短期大学教授・京都大学名誉教授	桂山 康司
閉会の辞	(17:30)		日本ハーディ協会会長・西南学院大学教授	金子 幸男
懇親会	別途ご案内いたします。			

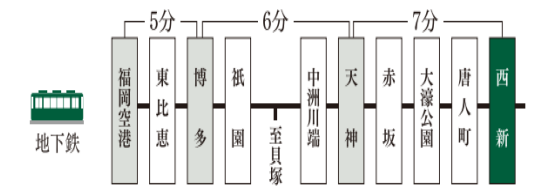
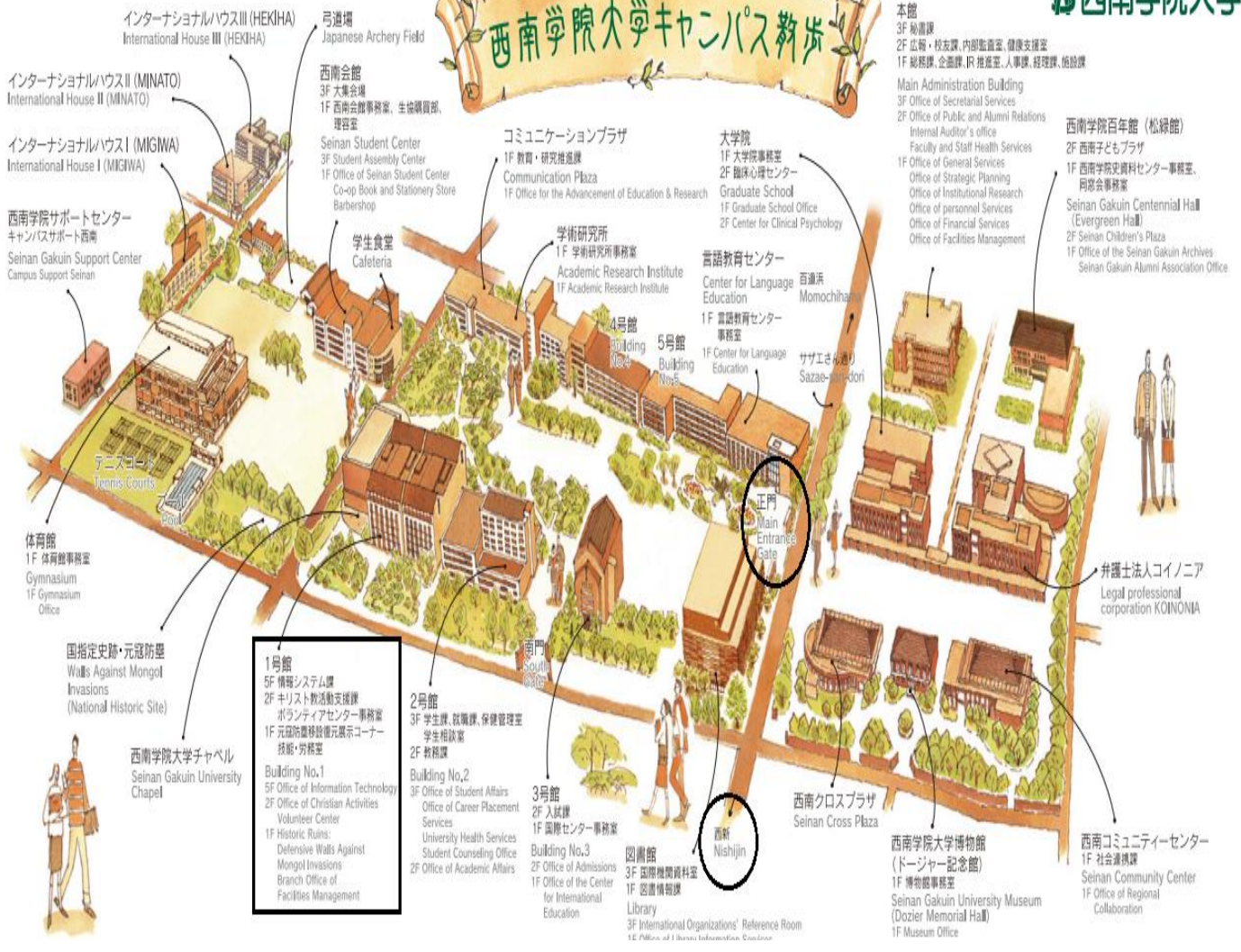
- ※ 受付は10時30分から開始します。懇親会に参加される方は、受付の際に懇親会費をお支払い下さい。なお受付では年会費の徴収は行っておりません。
- ※ 昼食は、休憩室(1-306教室)、控室(1-307教室)で取ることも可能です。大学近隣の飲食店も利用できます。なお、休憩および控室では、茶菓の準備はいたしておりませんので、飲み物等は各自でご用意ください。
- ※ ゴミの処分は各自でお願いします。各部屋にゴミ袋を用意いたしますが午後3時までには片づけます。それ以後のゴミについてはお持ち帰りください。
- ※ 新型コロナウイルス感染症の拡大状況およびその他やむを得ぬ事情によっては、リモート開催に変更させていただきます。
- ※ 大会への出欠確認については、別途ご案内いたします。非会員で当日参加希望の方は、あらかじめ下記の日本ハーディ協会事務局までご連絡ください。
- ※ 当日は、密にならないよう十分に広い会場で行います。発熱や咳、倦怠感などの症状がある場合は参加をお控えください。

問い合わせ先: 日本ハーディ協会事務局  
〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3丁目4-1 近畿大学経営学部 高橋路子研究室内  
メールアドレス: [jimu.thsjapan@gmail.com](mailto:jimu.thsjapan@gmail.com)

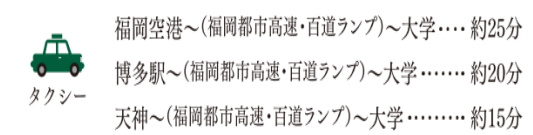
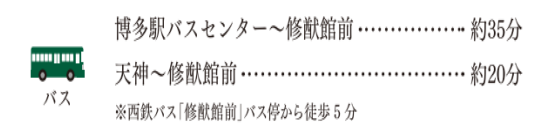
主催  
後援

日本ハーディ協会  
西南学院大学 学術研究所

## 西南学院大学キャンパス案内



※地下鉄西新駅(1番出口)から徒歩5分



※福岡市営地下鉄「西新駅」からは1番出口が便利です。

## 《研究発表》

『恋の霊』と幻想の本質—「気質」と「描写」の統合的理解をめざして

丹野 海晴

(TANNO Kaisei)

ハーディ最後期の小説である『恋の霊』(1892; 1897)が孕む幻想性を理解すべく、従来様々なアプローチが行なわれてきたが、創作技法としての「主観的印象」と登場人物の特性としての「夢想癖」とでも呼べるような気質が混同されていることはいささか問題である。“The Science of Fiction”(1891)にて漠然と示唆されている印象的創作技法や後期ターナー、ウォルター・ペイターの影響を想起すれば、当該小説にてハーディは神の目というよりむしろ人間の知覚作用を重視した創作を実践しているとひとまずは納得できる。しかしながらこのような分析は『恋の霊』の副題“A Sketch of a Temperament”の“Sketch”の部分进行考察したに過ぎない。ジョスリン・ピアストンを主軸とした登場人物の夢想性は“Sketch”される対象としての“Temperament”であり、創作上の工夫とは弁別すべき事項である。そして創作技法とは別に、1880年代から1890年代に執筆された小説には夢見がちな気質の人物が多く描かれている。世紀末のハーディが人間の気質としての夢想や幻想に専心し、かつ小説家の心構えとして主観的印象を重視していた事実は瞠目に値する。

本発表は『恋の霊』を構成する“Sketch”と“Temperament”をそれぞれ整理して分析し、当該小説の理解、ひいてはハーディの創作技法理解の一助となる議論を試みる。ハーディのエッセイや『恋の霊』周辺の長編・短編小説を睥睨しつつ、小説論としての“Sketch”と登場人物の幻想的気質としての“Temperament”を統合した『恋の霊』の特性を明らかにしたい。

## 《シンポジウム》

### ハーディと食

はじめに

土屋 結城

(TSUCHIYA Yuki)

2020年に発生した新型コロナウイルスのパンデミックにおいて、奇妙にも注目を集めた行為に食がある。黙食や孤食という聞き慣れぬ言葉が広まり、一方でその動きに対抗するかのようによく共食、縁食という言葉も生まれ、食が果たしていた社会的役割に改めて光が当てられた。

食という行為の文化的、社会的な側面に注目し考察を始めたのは人類学や社会学であると指摘されるが、現在では学際的な広がりをもって論じられる題材である。ハーディ作品においては、2017年に *Food in the Novels of Thomas Hardy: Production and Consumption* を著した Kim Salmons が、作品中の食への言及を通して19世紀イングランドの歴史的、社会的、政治的变化を論じることが

できると述べており、文学作品の読解においても興味深いテーマであることを示した。

本シンポジウムでは、司会者を含めて3名の講師からハーディ作品における食の問題、表象を多角的に提示し議論を深めたい。

## 蜂蜜酒の紐帯 ——“The Three Strangers” を中心に

土屋 結城

(TSUCHIYA Yuki)

文学作品における食というテーマについて中川僚子は「食というあまりに日常的な営みは、そのあまりの日常性のゆえに、思索の対象として問いを立てにくい」と述べており、ハーディの作品研究においても Kim Salmons が “food itself has, until now, largely remained the critically ‘unseen’ in Hardy’s novels.”と指摘するなど、食というテーマが軽んじられてきたことが示唆されている。一方で、それゆえにこそハーディ作品における食はなお未開の領野であるとも言い得るのであり、そこから得られる新たな読みの可能性は決して小さくない。

本発表では、Carolyn Korsmeyer が食について “One of the most significant roles of food is social: eating is part of rituals, ceremonies, and practices that knit together communities”と指摘する役割、すなわち共同体の人々を結びつける、あるいは切り離す役割を果たしている点に注目し、その観点から新たな読みの可能性を含む “The Three Strangers” を取り上げる。中でも象徴性に富む蜂蜜酒（ミード）が共同体において果たす役割をハーディの他の作品も参照しながら考察したい。

## *The Mayor of Casterbridge* を「食」から読み解く ——小麦と穀物法

今村 紅子

(IMAMURA Beniko)

*The Mayor of Casterbridge* (1886)の1912年の序文において、ハーディはカスターブリッジとその近隣の地方都市でも実際におこった「妻売り」の事実、また「穀物法 (Corn Laws)」の撤廃直前に襲った凶作について、歴史的事実を切り取って小説内時間で描いたことに言及していた。近世イギリスの民衆社会におけるコミュニティの連帯、異分子に対する制裁としての妻売りやスキミティライド、主人公マイケル・ヘンチャードの成功と没落が、イギリスの穀物取引事情を背景とした社会情勢のなかで、民衆の猥雑さや因習と相まって悲劇を生みだした。本発表では、furmity や小麦をめぐる「食」にかかわる文化的、歴史的要因が、ヘンチャードの破綻をもたらす本作の複雑なプロットの鍵となり、共同体の規範からの逸脱へとつながることを考察する。

*Food in the Novels of Thomas Hardy* (2017) の Kim Salmons によれば、ヘンチャードの悲劇について描かれた歴史は直線的な経路をたどるのではなく、フォークロアや神話の再構築に基づいているという。「穀物」がこの循環性を象徴しているのだ。本作における「食」の神話的、隠喩的な文脈については、ジェームズ・フレイザーの *The Golden Bough* (1890) における the corn spirit/king とヘンチャードを重ねている。収穫が終わると殺され、春になると新たな王が誕生するその再生の

物語は、歴史的、先祖伝来の伝統が近代化によって置き換えられていくカスターブリッジの物語と通底する。

### *Jude the Obscure* における食材のシンボリズム——豚肉・酒・パン・卵

福原 俊平

(FUKUHARA Shumpei)

食に注目して *Jude the Obscure* を読んでみると、ハーディは細かなところにまで意識して食材に象徴的な意味合いを持たせ、登場人物の対比効果を高めるために用いていることに気づく。豚肉と酒は本能的な欲求と結びつけられ、アラベラ親子の描写においてはそれらとのつながりが繰り返し強調されている。他方で、ジュードはパンとの結びつきが強調され、少年時代から大学で学ぶ夢が破れた後まで、パンは学問への希求を表すものとして描かれ、アラベラ親子の豚肉と酒と対比される。また、アラベラとスーは対照的な人物として造形されているが、そこでも食材を使ってコントラストが強調される。鳥と卵はアラベラとスーのどちらにも関連付けられるが、その意味合いは正反対である。アラベラがジュードを誘惑するために卵を使っているように、卵は女性の fertility と結びつけられるが、スーに関しては、リトル・ファーザー・タイムの自殺と子殺しに気がつく前に卵を茹でており、孵化する前の卵と茹でられた卵という形で正反対の用い方がされている。

本発表では、これらの食材が登場する場面を読みながら、ハーディの細部にまでこだわった食材のシンボリズムを例証し、ハーディ研究における食のテーマの可能性の一端を示したい。

## 《特別講演》

### 連形式による語りの可能性の追求：

#### ハーディ詩における連 (stanza)

神戸女子短期大学教授・京都大学名誉教授

桂山 康司

(KATSURAYAMA Kohji)

ルネサンス期における叙事詩の形式をめぐる多様な模索の中で、Homer にまで淵源する stichic な形式—例えば blank verse—が優勢となり、イタリア詩人や Spenser による stanzaic な語り口の試みは叙事詩形として本流とはならなかった。一方で、抒情詩形の代表である sonnet はむしろ sequence として書かれ、語りの要素が強化された。Stanza 形式における脚韻による統一性の付与は、抒情的高揚感の表出には効果的だが、一方で、それは同時に、ダイナミックで遠大な物語の進行にとっては停滞を意味する。

19世紀になり、詩が小説にその地位を奪われ、それでもなお書かれ続けられた際の重要な焦点のひとつは脚韻であった。Byronの風刺詩における脚韻の巧みさは感嘆のうちに模倣され、ヴィクトリア朝には、脚韻の整然とした連続を競うかのような詩—三行連句 (triplet) による stanza 形式の物語詩などが現れる。脚韻の洪水の最中であって、Tennysonの繊細な響きが愛好されるわけである。このような詩の頹廢期にあって、新機軸が G. M. Hopkins (1844-89) によって試みられるが、時代の受け入れるところとはならず、それが知られるのは、第一次世界大戦開戦を経て、初版詩集の出版 (1918) 後となる。

しかし、このように脚韻が脚光を浴びながらも、一方で、それと親和性が強いとされる stanza 形式それ自体における大胆な新機軸は、Hopkins における sonnet 形式における試みを例外として、詩人ハーディの登場を待たねばならなかった。ハーディは、当代のアンソロジーに集積された抒情詩の多様性をつぶさに検討し、生涯において 600 を超える、新しい stanza 形式を造形した。この抒情詩形における圧倒的な生産性は、単に詩人の創意工夫による努力によるというだけでなく、詩の内容と形式についての詩人の独自の知見があつてのことと想定できる。今回の発表は、その推定の試みである。